

ワスレナグサ（ワスルナグサ、シンワスレナグサ）

牧 幸 男

「ワスレナグサ」響きのよい名前である。ロマンチックな表現から、この花を好む人が多いが、植物名が先行し花の姿に接する機会が比較的少ない植物かもしれない。本格的な春が訪れると、地面を這っていたこの植物が急速に成長する。

忘れな草はヨーロッパ、アジア原産のムラサキ科の多年草で、鉢植や花壇に栽培されている。地下茎より茎をだし、高さ 30 cm 位、まばらに枝分かれする。春から夏にかけて、先端が蠅さそりの尾状に巻いた総状花序をだし、短い柄があり、るり色で中心が黄色の小花つぎつぎと咲く。花の形と配色の妙が、清純可憐な花の印象を強くしている。植物全体が綿毛に覆われているソフトな感じ、花には珍しい青色が、人々の好みに合致するのかもしれない。庭に植えると、春に咲いた花の種子がこぼれ、再び芽を出し成長するので、一年中花を楽しめる。最近では品種改良された白やピンクの花も登場している。

ヨーロッパ原産で、北半球の温帯から亜寒帯（ユーラシア大陸・アフリカ大陸・オセアニア）に約 50 種が分布しているムラサキ科のワスレナ属の総称で、一年草（寒冷地では多年草）、春から夏にかけて小花を次々と咲く。花の色は薄青色、鮮青色（園芸種はさらに白色、ピンク色、黄色等）をした 6-9mm 径の小さい 5 弁の花を咲かせ、花冠の喉に黄色・白色の目をもつ。草丈は高さ 20-50cm、葉は細長く平らで互生、長楕円形もしくは倒披針形である。葉から茎まで軟毛に覆われている。



青色のワスレナグサ



ピンク色のワスレナグサ

日本に渡来したのは、明治時代に園芸業者がノハラワスレナグサ (*Myosotis alpestris*) を輸入したのが最初と言われ、現在野生化し日本各地に分布している。私たちがよく目にする類似植物に、中部以北の深山に生育するエゾムラサキがある。私が以前、6月に徳本峠を越え上高地まで歩いた時、明神池の少し手前で、群生するエゾムラサキ（ミヤマワスレナグサ、ムラサキグサ）*M. sylvatica*、に出会った。新緑の林下一面に咲く青色の花の姿に、しばし時を忘れ、疲れきった体に元気を与えてくれた思い出の花である。その時、忘れな草とはこの花だろうと思った記憶が残っている。花の数がやや少ない点、がくの裂け方浅い点などの違いがあるが、遠くからでは忘れな草と区別がつきにくい。

又、以前フランスを訪れたとき、ジベルニーのクロード・モネが晩年を過ごした家を訪れた。広い庭には、彼が日本に求めた睡蓮を植えた池や様々な植物を植えた庭が見事だった。5月初旬だったので忘れな草が見事に咲いていた。(表紙の写真参考) これほどの群落にであったことがなかったので、感激と共に忘れな草の物語りを思い出した。

忘れな草が多くの人に愛されているのは、ヨーロッパに伝わる幾つもの伝説や詩歌によるものと思われる。その中の2点を紹介する。

そのひとつが、創世記が基本となっている物語がある。「Adam が Eden の園の植物の全てに名を付け終わると、神は Adam を連れて園内を巡回し、植物がそれぞれの名を覚えているかどうかを調べ回った。その時、Myosotis という覚えにく

い名をつけられた青い小さな花だけはうなだれて、申し訳なさそうに小声で「I forgot」とわびた。神はその小さな花を哀れんで、「Never mind if you have forgotten your name, little forever: but see that you forget ME not」と慰め、改めて forget-me-not の名前を与えたと言う。

もう一点、最も知られている物語は中世ドイツの悲恋物語である。内容は、「愛しあう二人の若者が、ドナウ河の川岸を散歩している時、川岸に咲くこの花を見つけた。若者は彼女のためにその花を摘み取ろうとした時、足を滑らして急流に流されてしまった。重い鎧を着けていた騎士の彼は自由を失い沈んでゆくが、手にした花を彼女に投げて、「私を忘れないで Vergiss-mein-nicht!」と叫んで川底に姿を消した。」である。英国の詩人 Miss Pickersgill は「The Bride of the Danube」の詩で、この物語を詠んでいるが、その最後の節で Still calling them 「Forget-me-not」(今も忘れな草と呼んでいる。)と紹介したのが、今日膾炙されている植物名となっている。

我が国では上田敏が『海潮音』で Wilhelm Arent (1864年 - 没年不明) 作詞の Vergissmeinnicht (わすれなぐさ) の詩をひらがなで紹介している。(初出は明治38年8月の『明星』)

ながれのきしのひともとは (流れの岸の一本は)
みそらのいろのみづあさぎ (御空の色の水浅葱)
なみ ことごとく、くちづけし (波 ことごとく、口づけし)
はた、ことごとく、わすれゆく (はた、ことごとく、忘れゆく)

この植物が詩歌に詠まれるようになったのは、渡来時期から明治以降である。

仏蘭西の みやび少女が さしかざす 勿忘草の 空いろの花

あいまじん
藍微塵 遠き師の恋 歌の恋

北原白秋

石原八束

植物名について、牧野富太郎博士は「俗名で forget-me-not と呼ばれていることから「私を忘るなよ」に意味であるからワスルナグサと呼ぶ方が良いと思う。」と述べている。漢名は当て字であるが「勿忘草」や「藍微塵」を使っている。日本名の命名者は、植物学者の川上瀧弥 (1871~1915) で1905年に「勿忘草」「忘れな草」と訳した。

学名は Myosotis scorpioides、属名は葉の姿が多毛で柔らかいのでギリシア語で Myos (二十日鼠) + Otis (耳) から命名、種小名はサソリの意で花咲く姿がサソリの尾に似ているからである。

薬用の利用は我が国ではないが、ヨーロッパで肺等の呼吸器疾患 (喘息や慢性気管支等) にシロップとして利用した。しかし、肝障害、発がん性があるとされているピロリジンアルカロイドが含まれていることが分かり、使われなくなったようである。

園芸用として花壇や鉢植え等に利用している。

花言葉は「真実の愛情」、「真の恋」、「私を忘れないで下さい」である。なお、アメリカ合衆国アカスカ州の州花となっている。



モネが住んでいた庭

